

恵海著「アベノミクスの春」パート2 大機小機、日本経済新聞 2017年4月14日朝刊を読む

1. (1)最近の日銀短観や資金循環勘定は、
  - (2)日銀の量的質的緩和政策（QQE）や政府の公共投資続行により、
  - (3)日本経済がデフレから脱却し、着実に拡大していることを明確に示している。
  
2. (1)短観の業況判断は、
  - ①大企業製造業が、
  - ②世界的な景気回復による
  - ③機械関係業種の好調を主因に
  - ④2期連続の増加となった。(2)非製造業も、サービス業を中心に拡大を続けている。  
(3)さらに、中小企業製造業の業況判断は10年ぶりの高水準だ。  
(4)設備投資も順調で、
  - ①資本ストックの平均年齢も若返り、
  - ②資本の生産性上昇もうかがわれる。
  
3. 日本の潜在成長率は、
  - ①技術進歩を内生化した「R・ソロー・タイプの生産関数」を用いて計測すれば、
  - ②内閣府推計の0.8%よりも高く出ると推定される。
  
4. (1)資金循環勘定は、
  - ①QQEによる株高や円安効果で税収が増加、
  - ②家計・企業の金融資産も急増し、
  - ③日本経済の内容の劇的変化を示している。(2)①すなわち、社会保障基金の資産が前期比10兆円増加し、236兆円と既往最高となり、
  - ②この結果、一般政府の純債務は、747兆円と、国内総生産（GDP）比138%に大幅に改善している。(3)家計の総・純金融資産も、1800兆円・1409兆円と既往最高だ。
  
5. (1)さらに、金融機関の保有資産(株式・対外投資を除く)も増加を続けており、  
(2)QQEやマイナス金利の効果で、金融機関のポートフォリオバランス(保有資産の再構成)も順調に進んでいる。
  
6. このように、最近公表された日銀短観や資金循環勘定を虚心坦懐(きょしんたんかい)に見ると、
  - ①QQEと財政支出増を中心に据えたアベノミクスが、

- ②「経済活動の好転という一次効果」にとどまらず、
- ③「家計・企業による過去最高の金融資産保有、
- ④一般政府債務の純減、
- ⑤金融機関のポートフォリオ・リバランスの進展
- ⑥などの二次効果」も明確にもたらしている。

7. (1)世界を見ると、

- ①米国経済の好調を反映し、米連邦準備理事会(FRB)の利上げが進み、
- ②「欧州中央銀行(ECB)は、量的緩和(QE)の期限は延長したが、国債等購入額の減額を始めた。

(2)日本では、

- ① 2%の物価目標達成にもう少し時間を要すると見られているが、
- ②日銀が市場の混乱回避に十分な注意を払い、
- ③国債等購入額減額の可能性に言及する方向に徐々に、しかし着実に向かっている。

[コメント]

「アベノミクスの春」パート2の恵海氏のコメントは、日本経済の現状を正しく見ている数少ない意見として高く評価したい。

— 2017年4月21日(金)林明夫—